

Interview No.1 小野寺達也さん



東京大学法学部卒業後、みずほFGを経て、森ビル文化事業部アカデミーヒルズで会員制図書館事業を担当。その後東京大学渉外本部で、基金事業の新規立上げを担う。大学ファンドレイジングの経験を活かし、東京マラソン財団、大学、スポーツチームなどのアドバイザーとして活躍。2017年にオリックス株式会社に転職し、医療ヘルスケアの新規事業開発に従事。医療ヘルスケアへの関心が深まり、2021年に株式会社メドミライの設立に至る。

出身大学の周年事業の運営を手伝うことになったのが、最初のファンドレイジングの体験への入口でした。卒業生名簿を1からつくり、協賛営業をして、データベースをつくって、ホームカミングをやって…と、とにかくなんでもやりました。NPOを一つつくるくらいの取組でしたね。

もともと社会を作る側に回りたいという想いがあって、大学時代は官僚を目指していました。卒業後は銀行に入学、銀行から官庁に出向、その後森ビルの会員制図書館でのコミュニティ運営に携わって、といろいろ経験しました。今思えば、銀行時代のコンプライアンス意識、経営者との対話力、コミュニティ運営といった経験は、大学のファンドレイジングでも活かしていたと思います。大学にファンドレイジング室とアルムナイオフィスができて、3年間のキャンペーンで資金調達規模も100億を超えました。

ファンドレイジングは成果が出るまでに時間がかかります。お願いしたうちの数パーセントしか成果が出ないこともあります。やっぱりやり続けることが大事です。挑戦し続けること、新しいものを生み出すことが面白くて、今は自分の会社で医療ヘルスケアに係る仕事をしています。この仕事もいずれ「医療を支えるコミュニティづくり」に発展させたくて、これまでの経験を活かした事業展開を楽しみに考えています。

Interview No.2 低引稔さん



大学時代にインターン生として創業期のNPO法人フローレンスに携わり、そのまま新卒で入社。病児保育事業部長、おうち保育園事業の立ち上げを担当。2011年に認定NPO法人カタリバに転職し、経営管理本部ディレクターとして、主にITの側面から組織基盤強化に従事。2018年に独立し、パンガシラをスタート。ソーシャルベンチャーの組織基盤づくりのハンズオン支援、社会的投資事業の立ち上げ・運営に取り組んでいる。

大学時代に子育て支援の勉強会でフローレンスと出会い、インターンとして関わりはじめ、そのまま新卒で入社しました。当時は立ち上げ初期だったので、朝から晩までハードワークの日々でした。入社して1年は、どれだけ仕事をしていても社会課題解決に近づけない感覚が募り、かなり自己肯定感が低かったですね。

そんな中で徐々に自分の軸となっていくのがITを中心としたバックオフィスの専門性です。元々IT人材ではなかったのですが、社会へのインパクトを最大化し、団体のリソースを効率的かつ最大限に活かすために必要だと思って、データベース設計などのバックオフィスを支える力を磨いてきました。バックオフィスの専門人材はNPO業界では珍しく、その後もカタリバをはじめ様々なソーシャルベンチャーの創業・第二創業に携わってきました。特にファンドレイジング領域においては、デジタルマーケティングを実現する上での基盤づくりや、企業・行政の資金提供者むけのアカウントビリティ設計など、「攻めるために組織を固める」という視点からサポートしています。

現在は「再生可能エネルギー×地域」をテーマに、全国のローカル起業家・社会起業家のサポートに注力しています。ファンドレイジングができる人は、営利・非営利に限らず、分野を越境できる強みがあります。やり方次第で、キャリアレンジはいくらでも広げられると思います。

Interview No.3 小川愛さん



日本アイ・ビー・エム株式会社入社後、社内広報、宣伝部門にて企画・実施を担当。その後、IBM Asia Pacificへの出向や、IMC部長、ブランド推進部長を担当。その後、社会貢献部長に就任し、6年間NPOや自治体と連携する事業に従事。2019年にファンドレイジングスクールにてファンドレイジングを学び、日本ファンドレイジング協会に入局。2020年4月から同協会事務局長に着任。

日本ファンドレイジング協会働く前には、外資系企業で30年、広報・宣伝・マーケティングの部門で勤務していました。最後の6年間は社会貢献部で、NPOや自治体の教育委員会と仕事をすることになったのですが、社会課題に立ち向かう人たちと一緒に仕事をすることはとても魅力的であると感じ、それが転職の意向にも繋がりました。

協会に入職して3年が経ちますが、この業界の地図がようやく見えてきたという実感があります。企業とNPOの意思決定の進め方や違いなども感覚的に身につけてきました。

これから、ファンドレイザーには「社会のあるべき姿を描く力」が求められると考えています。社会課題から逃げずに対峙して、大きい組織にも躊躇せず、提案ができる勇気や自信を持つこと。その実現のために、資金調達だけでなく、どのようなリソースが必要なのか組み立てて実行する力、それがファンドレイザーに求められていると思います。そのためには、自分の芯にブレない考えを持つことも重要です。

ファンドレイザーは突き詰めれば未来を作れる仕事でもあると言えます。頑張りでも未来を変えられる、そんなファンドレイザーを増やしていかなければと思っています。

Interview No.4 浅井美絵さん



大学卒業後、国際交流NGOピースボートで国境を越えた平和な世界作りとソーシャルイノベーターの創造を目指す現場を経験。その後、一般企業で人材開発とマネージメント、組織内における業務プロセス管理を担当。NPO組織の経営的な課題解決に挑戦するためNPO業界へ戻り、国際人権NGOヒューマンライツ・ナウにて実務マネジメントとファンドレイジングを担当する。ファンドレイジングの重要性と可能性を感じ、2015年2月よりフリーランスとして独立。

「人と人が出会うことで何かが起こるって面白い!」という想いが、仕事の根底にあります。学生の頃、自分の生まれた環境と異なる世界に関心があり、フィリピンや大阪の路上生活の方がいる地域に赴きました。出会った人々はそれぞれ大変な環境で暮らしておられましたが、元気で明るく生命力にあふれていて、「自分は支援をする側」という考えが吹っ飛びましたね。そして、バックグラウンドの違う人たちが一緒に共通の目的に向かって取り組むことから、たくさんの学びを得ました。これが、現在もファンドレイジングを「人を繋ぐ仕事」と捉えている原体験になっていると思います。

その後、営利企業で人材マネジメント等の経験を経て、NPOに戻った後に独立というキャリアパスですが、独立はライフスタイル重視の選択でした。収入が安定するかは不安でしたが、上手くいかなかったらNPO職員に戻れば良いと考えて、思い切って独立しました。自由度の高い生活を望んでいたのがフリーランスは自分に合っていると思います。

ビジネスセクターでスキルを持っている人も、副業や仕事の割合を変動させてNPOに関わる方法もあります。ファンドレイザーだけでなく、多様なスキルを持つ人たちの広い領域でファンドレイジングのネットワークが広がってほしいです。

Interview No.5 水谷衣里さん



三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社(MURC)にて、民間公益活動の基盤強化に関する調査研究や、企業の社会貢献活動、CSR/CSVの実現に向けたコンサルティングに従事。在籍中に、同社の社会貢献活動の運営事務局や東京工科大学メディア学部専任教員に着任。2017年春に独立。専門分野は、社会的インパクト投資等のソーシャルセクターの資金還流や、ソーシャルアントレプレナー等の育成支援、ソーシャルビジネスの経営支援等。

「政策や社会制度を考え、つくる場に身を置きたい」と考え、シンクタンクであるMURCで働きました。自由度が高く、やりたいテーマにチャレンジできる一方で、専門分野を開拓し成果を出さなければならぬ厳しさもありました。クライアントからの期待に応える緊張感や、鍛えていただいた経験は、今につながる大事な財産になっています。

独立後も変わらず「民が担う公益の可能性と価値を拡充する」ことをテーマに、調査研究やコンサルティング、人材育成に取り組んでいます。政策・制度に関する内容から、現場団体の基盤強化、そしてその間をつなぐ仕組みづくりまで、幅広い内容をご依頼いただいているのは、ひとつの特徴かもしれません。またキャリアという意味ではシンクタンクにいた頃から大学で教える経験や論文や書籍を書く機会を頂いていました。そうした時はいつも、学術的な脳を使う場面と、より実践的な思考をする場面を切り替える必要性を感じています。

リサーチやコンサルティングにはどこか俯瞰的な側面がありますが、それだけで社会は変わりません。現場で汗をかいている人たちへのリスペクトは忘れたくないな、ぞんざいに扱いたくないないつも思っています。



10人の航路

Interview No.6 岸本和久さん



1987年野村證券に入社し、22年間の海外駐在を経験。野村ホールディングスのIR室長、米州野村の経営企画部長などを勤めた。2017年、社内ビジネスコンテスト「野村イノベーターズ」で「富裕層と社会貢献を結ぶ、有価証券による寄付のプラットフォーム」で最優秀賞を受賞。このプロジェクトの実現のため、2020年4月に野村證券を退社し、日本フィランソロピック財団を設立・代表理事に就任。

野村證券に勤めていた際、NPOの若いリーダーの方々に話を聞く機会がありました。ここでNPOの資金調達への厳しさを知ったのが、一番はじめにお金の流れのデザインを考え始めたきっかけです。野村證券では長く海外赴任をしていましたが、寄付金で基金をつくらせて社会貢献団体に助成する「ドナーアドバイズドファンド」という海外の資金提供のスキームを知り、これを日本に持ってきたいと考え、日本フィランソロピック財団を設立しました。

財団では、基金の名前や支援のテーマ、運営方法などを、寄付者の想いに沿って設計します。助成先だけでなく寄付者の方にも「自分の想いを形にさせていただいてありがたい」と言っていたら、本当に良い仕事だと感じています。

現在は一人ひとりの寄付者の想いを基金という形に変えてNPO支援に取り組んでいます。数年以内には「社会課題の解決」を起点に資金力のある方々のご寄附を基金化することにも注力して、お金の流れを変えていきたいとも考えています。資金規模が10億円以上のNPOを増やし、ソーシャルセクターのマーケットを大きくする必要があります。これには金融機関とNPOの橋渡しが必要なので、金融経験者にできることがまだまだあると感じています。

Interview No.7 三浦美樹さん



一般社団法人日本承継寄付協会代表理事。司法書士試験合格後、不動産登記等メインの個人事務所勤務を経て、相続専門のチェスター司法書士事務所として独立開業。2019年、一般社団法人日本承継寄付協会を設立し、相続時の寄付案内サポート、遺贈寄付研修・案内冊子無料配布、遺言書の助成制度づくりを通じ遺贈寄付の推進に取り組む。

20代の時、怪我で4年間まったく何もできない車いすや松葉づえでの生活を経験しました。誰かに助けてもらわないといけない体験を経て、「誰かの役に立つ仕事をしたい」と思うようになりました。まずは手に職をつけようと考えたのが、司法書士の勉強を始めたきっかけです。

その後、自分の人生を改めて振り返る機会があり、何もない空間で「日々普通に暮らしている」ことが奇跡のように感じ、すでに多くのものを受け取っていることに気がきました。相続の仕事をする中で行き場のないお金があることを知っていたので、これを必要とされているところに繋ぐことが自分の仕事だと思い至りました。帰りの新幹線で「そうだ、寄付だ!」と思い至り、その1か月後には日本承継寄付協会を立ち上げていました。

遺贈寄付を広げるには「妄想力」が必要です。寄付者とのコミュニケーションには数年を要し、すぐに誰かが喜んでくれることは少ない中、より良い社会を妄想し多くの関係者と目標を共有していきます。先人から受け継いだものを後世に返す、胆力が必要な仕事です。

遺贈と聞くと「死」を連想する方も多のですが、本質的には「生」を輝かせる活動です。実は寄付するハードルは低く、自分の志に出会い直したり、仲間も増やせる。寄付者にとっても、受遺者にとっても、ファンドレイザーにとっても、人生に新たな財産を与えてくれるものだと感じています。

Interview No.8 山本響子さん



2005年に財団法人（現公益財団法人）新日本フィルハーモニー交響楽団に入団。パトロネージュ室担当として個人・法人の寄付業務やプロボノ活動に携わる。2016年に公益財団法人読売日本交響楽団に転職。ファンドレイジング担当として、寄付や助成金申請の業務を推進。2017年には賛助会員システムを導入し、楽団の新たな収益の柱として設計する。2021年4月より一般財団法人日本民間公益活動連携機構（JANPIA）企画広報部に入構。

オーケストラで会員制度の設計やドナーリレーションを担当する中で、ファンドレイジングの楽しさを体験してきました。寄付者に支えてもらう側なのに、「寄付をさせてくれてありがとう」と言っていたこともあり、寄付を通じた繋がりをつくる仕事にやりがいを感じていました。

一方で、オーケストラという取組の存在価値をさらに可視化できないかとも考えるようになりました。オーケストラで働くという専門的なキャリアを突き進もうか迷いましたが、コロナ禍で様々な社会課題が顕在化し、より俯瞰的な目線で社会を見る力をつけていきたいという想いが強くなり、転職を決意しました。

現在は誰ひとり取り残さない社会を目指す JANPIA でファンドレイジング研修等の企画をしたりと、これまでの経験を活かした仕事できています。また、様々な社会課題を知り、それぞれの団体・事業のゴールやインパクトを可視化させる方法を考える仕事もできています。いつかこの経験を活かして、音楽業界にも恩返しできないかと考えています。

ファンドレイジングの魅力の一つは、人のやさしさに触れることができること。やさしさに触れると、自分もやさしくなれることだと思っています。これからもやさしさの連鎖をつくるような仕事をしていきたいです。

Interview No.9 土屋一登さん



岩手県の被災地復興支援を行うNPOや世界の差別問題撤廃に取り組む国際人権NGOでのインターンを経て、NPO法人ヒューマンライツ・ナウにファンドレイジング担当として入職。その後、認定NPO法人カタリバにてインターネットを活用した人材募集や継続寄付者の募集業務に従事。2021年1月に個人事業主として独立し、真山舎を創業。2022年9月に仲間と共に法人化し、一般社団法人真山舎を設立、代表理事に就任。

学生時代のギャップイヤーを活用して、カタリバの東北復興インターンに関わった経験が自分の中で大きな原体験になり、NPOセクターで働きたいと思うようになりました。その後、繊維商社、人権NGO、ヒューマンライツ・ナウ、カタリバと様々な組織で仕事をしながら、ファンドレイザーの資格を取得したり大学院に挑戦したりもしました。ただ、その過程で体調を崩してしまって、地元の長野県で療養する時期もあったんです。

これからファンドレイザーを志す方には、「社会課題の解決を『楽しい』』と言っていいんだ」ということを伝えたいです。現場にいる人たちの組織を支援したりお金を集める行為について、やりがいを感じてほしいという意味合いです。もちろん失敗して落ち込んだり、「ファンドレイザーは向いてないんじゃないか」と思ったりすることもあると思います。でも、楽しくない、辛い、苦しいと思ったら、一度立ち去ってもいいと思うし、落ち着いたときに戻りたかったら戻ってほしいと思います。

私も辛い時期がありましたが、「社会課題の解決」は「楽しい」ものだったので、今もこうしてNPOセクターで働くことができています。今は独立して仲間たちと一緒に社団法人を作っていて、毎日とても充実しています。

Interview No.10 石原達也さん



2001年大学生のみのNPO法人設立に参画。2003年鳥取市社会福祉協議会に入職。ボランティアコーディネーターを務めた後に転職し、出身地・岡山でNPO法人岡山NPOセンター事務局長に就任（現在、代表理事）。その後、岡山県内で様々なNPOやソーシャルビジネスの設立に携わり、まちづくり、社会事業の開発・経営や仕組みづくり、プロジェクトマネジメントやファシリテーションに取り組む。

大学生のとき、1999年のNPO法ができた翌年というタイミングで、仲間たちと一緒にNPO法人を作りました。学生起業が主流になった今と比べると、とても珍しかったのではと思います。その後、プレーパークなどの事業運営や社協でボランティアコーディネーターとしての経験を積んで、27歳のときに岡山NPOセンターの事務局長になりました。

中間支援組織やファンドレイザーに求められるのは、「見通しを持つ力」であると思っています。たくさんある社会課題について、段取りを組んでいく力です。どういふ人材やリソースが必要なのかを考え、それを実行に移すスピード感が大事だと思っています。

私たちがNPOを立ち上げた頃と比べて、今はNPOセクターが一般にも認知されてきていますし、先輩も増えました。だからこそ、よりフラットに「何が自分にとって良い・悪い」を考えられるようになってきているのではと思います。

私は困窮者支援、子ども支援、災害支援と、いろいろな事業に関わっていますが、すべての根底には「岡山で暮らす人たちに幸せになってほしい」という想いがあります。そういった「一本軸」や「こだわり」を持つ人が増えるといいなと思っています。



10 人の航路

